秋風と星と奇跡

秋風　冬

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
秋風と星と奇跡

【Ｎコード】
Ｎ３５１９Ｉ

【作者名】
秋風　冬

【あらすじ】
主人公　川瀬（かわせ）　優一（ゆういち）はどこにでもいるような普通の高校生。
成績も普通、運動神経も普通、ルックスも普通。
何をしても普通の少年が
高校２年の秋に体験する。
それはとても不思議で、
それは奇跡とも言える物語

少年と星空

９月３０日　ＰＭ９：００

僕は放課後まで文化祭の準備で疲れた足を重く引きずって、最寄の駅へと歩いていた。

僕の通っている学校から駅までは徒歩で大体３０分くらい。

その駅を利用している生徒のほとんどは自転車やバスを利用している。

僕も自転車通学生だが、昨日の帰り道でパンクしてしまって、本日は徒歩通学というわけだ。

「♪♪♪～♪♪♪～」

ポケットからメールが受信された時の音楽が、静かな夜道に響く。

この辺りは市街地とは離れているので、昼間の交通量はあっても、夜になるとガラガラだ。

そのせいで、この辺りは度々世間一般的に聞く不審者と呼ばれる人たちが後を絶たない。

まあ、男の僕には関係のない話しだけど……

そんなことを考えながらポケットの中へと手を入れていく。

ポケットから携帯を取り出して、画面を開くと……

送信先は母からだった。

『帰りが遅いから、もう先に晩御飯食べてるね』

その一言だけ書かれていた。
まったく、いつもながら文章が冷たい。
一応、返事だけ返しておく。

でも、もうそんな時間か？

そう思い、携帯の時刻を見ると９：１０と表示されていた。
確か学校を出たのが８：４０くらいだったから……
もう３０分近く歩いていることになる。
僕の今いる位置から駅まで１０分くらい。

……どうやら、いつもより随分遅いペースで歩いてたみたいだった。
それに、電車の発車時間は９：０５

もう十分手遅れである。

この辺りや僕の住んでいる地域は、世間一般的に田舎と呼ばれる地域なので電車も４０分に一本という悲しい現状である。

次の発車時間は９：４５くらいだったから随分と待つことになる。

どうしようか……と考えたところで、ふと今日はいつもより明るいことに気がついた。

そして、上を見上げると……

そこには夜空いっぱいに星が輝いていた。

ここは、片田舎なため都会と比べると星がよく見える。
中でも今日は、いつもより雲が少ないせいか星がよく見える。
そして、暇を潰すプランが決まった。
「しょうがない、時間潰しにあの場所に行くか」
そう小声で呟くと、進路を駅から別の場所に変更した。
１０分程度歩いた所で、その場所に着いた。
その場所というのは、平凡な川原。
僕は少し斜面になっている草むらの上に座る。
そして、その草の上に寝そべると……
闇の中に広がる、星
まるで綺麗に散りばめられた宝石のようだ。
たまに吹く夜風が、また気持ちがいいくらいに草の匂いを運んでくる。
ここには昔、
僕が小学生くらいのころに、両親と幼馴染（おさなじみ）とその両親とで一緒に見に来たことが何度かあった。

その幼馴染も中学校に上がる前に転校した。

そして、彼女と最後に見た夜空もここからだった。

あの日も、今日に負けないくらい満天の星空だった。

そんな幼き日の思い出に浸(ひた)っていると、背後から誰かが泣いている声が聞こえてきた。

そして、誰かがそれを慰(なぐさ)める声。

声からすると泣いているのは女の子で、慰めているのは男の子かな。

「そんなに泣くなよ、あやか。またきっと会えるから」

「だって、今度行く場所は……とても遠くだって……お父さんが言ってたもん」

「大丈夫だよ。大人になったらぼくが会いに行くから。ね？」

「……ほんと？　ゆう君」

「うん。じゃあ約束しよう。それなら信じてくれる？」

「うん」

そう言って、女の子の喜ぶ声。

普通なら、よかったよかったで感動する場面。

でも、僕は笑うことなんて出来なかった。

だって、振り向いた先にいたのは……

あの日

彼女が引っ越す日の前夜

僕と彼女が最後に見た夜の光景だったのだから

少年と星空（後書き）

はじめまして。
まずはじめにこの作品を読んでいただいて本当にありがとうございます。
僕にとってこの作品は初めて、言うならば処女作です。
まだまだ下手ですが、それはどうかご了承いただけたら幸いです。

女の子と出会い

９月３０日　ＰＭ９：３０

……おいおい、これは何の冗談だ？

僕は、今自分が目にしている光景に目を疑った。

僕の少し先には男の子と女の子が話している。

外見から見て、小学生高学年くらいだろう。

いや、問題点はそんなことではない。

僕はこの光景を見たことがある。

小学生5年のころ、この時期にこの場所で、

そして、あの女の子と。

もしかして……タイムトラベルとか言うやつか？

そんなことがあるのか？

でも、今自分が目にしている光景は間違いなくそれだった。

僕は近づこうと一歩踏み出した瞬間……

突然、世界が光に包まれた。

そして音もなく、世界は光に包まれて消えていった。

……ああ、今のは夢だったのか。

そう思って、次に目を開けると、先ほど男の子と女の子が立っていた場所に一人の少女が立っていた。

外見から言って、僕と同じくらいの年齢だと思う。

普通なら、今のは夢で済まされていたところだろう。

でも、その少女は僕と目が合った瞬間、こう言ったのだ

「ゆう……くん？」

間違いなく、その少女はそう言った。

そして、その呼び方で呼ぶ人を僕は一人しか知らない。

そう、僕の目の前に立っている少女は間違いなく、小学５年生のころ、親の転勤と一緒にこの地を去った……

僕の幼馴染だった。

幼馴染と再会

９月３０日　ＰＭ９：３０

僕こと川瀬（かわせ）　優一（ゆういち）は、今ありえないことを体験している最中（さいちゅう）だ。

いや、正確には考えられないことと言うべきだろうか。

「……あやか……なのか！？　」

いや、聞くまでもない。

絶対にそうだと言い切れる自身はある。

僕の質問に彼女は一言、「うん」とだけ答えた。

やっぱりそうだ。

僕の知っている幼馴染は彼女だ。

でも、一体なぜここに？

彼女は両親と一緒にこの町を去った。

それ以来、初めのころは手紙のやりとりもしていたが……

それも、１年経たずに終わってしまった。

その彼女がなぜ今ここにいる？

そう思って、僕が口を開こうとした次の瞬間、

僕の顔めがけて何かがとんできた。

僕はそれをかわす事も出来ずに、ただ見つめるだけ。

それが、やけにスローモーションに見えて、頬(ほお)に当たった瞬間実感した。

・・・・・・殴(なぐ)られたのか

少年と痛み

９月３０日　ＰＭ９：４０

……殴られた？

その実感（じっかん）が現実のものとわかったのは、頬に感じる鈍（にぶ）い痛みからだった。

「あ……やか？」

僕が呼び止めるより早く、彼女は草むらを走り抜けて行ってしまった。

……なんで？

僕……なにか悪いことしたか？

なにか気に障（さわ）るようなこと言ったか？

「……」

いくら考えても理由が思いつかない。

あやかが僕を殴った理由。

さすがに拳（こぶし）で殴りはしなかったが、平手でも十分痛い。

頬に広がる痛みは、少しずつ増しているような気がする。

それは僕の気持ちからなのか、それとも本当に痛むのか……

それ以上、僕は何も考えられなくなった。

いや、ただ一つ頭によぎった考え、

「今日は遅くなるかもしれないなあ……」

少年と悩み

９月３０日　ＰＭ１０：０５

「・・・・・・はぁ～」

思わずため息が漏れてしまう。

携帯電話の時刻はいつの間にか９時から１０時に変わっていた。

なんで余白の時間があるのだろう？

さっきまで９時半を少し過ぎた辺りだったのに・・・・・・

どうやらショックで思考が停止してたみたいだった。

それほど、彼女から殴られたショックは大きかったらしい。

「らしい」と仮定形なのは自分でも、自分の気持ちがわからないからだ。

「一体どうしたんだよ・・・・・・僕」

自分にイライラする。

何を思っているか、何を考えているか自分のことを理解できていないことに腹立たしい。

今、家に帰ったら家族に八つ当たりしてしまいそうだったので、もう少し川原で頭を冷やすことにした。

そして結局、終電に乗って帰り、家に帰り着いたのは今日から明日に変わった後だった。

朝と再会

１０月１日　ＡＭ６：５０

チュンチュン・・・・・・チュンチュン

「・・・・・・もう朝かよ」

あれから家に帰って、すぐにシャワーを浴びてベッドに入ったのはいいが、結局一睡も出来なかった。

セットしていた目覚まし時計が鳴るまで、あと１０分ほど。

そろそろ体を起こさないといけないが、どうしても布団から出たくない。

あれほど眠れなかったのに、今頃になって睡魔（すいま）が襲ってきた。

「・・・・・・今日、学校サボろっかな」

なんて思ってはみたものの、どうせ熱がない限り親から無理やりにでも行かされるんだから・・・・・・

仕方なく、眠（ねむ）たい目を擦ってベッドから起き上がってはみたものの、体から脱力感（だつりょくかん）が抜けない。

けど、そんなものは言い訳にしかならない。

ベッドから起き上がると、疲れてないと自分に言い聞かせていつも通りに過ごす。

「あ、おはよう。昨日は一体何してたのお兄ちゃん？」

「別に・・・・・・ちょっと色々あっただけだよ」

もうリビングには妹の梓(あずさ)が朝食を食べていた。

そして、思っていた通りの質問をしてくる。

「おかあさーん、お兄ちゃん色々あったんだって」

キッチンで洗い物をしていた母に報告する。

ここまでは予想の範囲内。

「放って置きなさい。高校生で朝帰りなんて、信じられないわ！」

・・・・・・怒ってる？

「まあまあ、今時の高校生なんてそんなもんだよ。おかあさんの考え方が古いんだよ」

・・・・・・おいおい、なんで僕が朝帰りということになってるんだ？

確かに日付は変わってたけど・・・・・・

それでも朝帰りはないだろ。

愚痴(ぐち)を言う母のことは無視をして朝食をさっさと食べて、学校に行く。

いつもと同じ時刻に学校に着いて、いつも通りに教室に入る。

自分の机に鞄(かばん)を置き、ＨＲが始まるまで待つ。

そして予鈴が鳴ってから少しして担任の先生が入ってきた。

ここまでは、いつもと同じ。

そして、ここから先はまったく違う展開になった。

担任の後ろから一人の女子生徒が。

まあ、ここまでくれば読者の皆さんも予想できるだろうが・・・・・

その女子生徒は昨日僕と出会っていた少女。

つまり、僕の幼馴染・・・・・・

白石(しらいし)　綾香(あやか)がそこに立っていた。

僕の記憶と彼女の記憶

１０月１日　ＰＭ８：１０

僕と彼女は幼馴染だった。

多分、とても仲良しだったと思う。

彼女はすぐ泣くし、我がままだった。

けれど、それをしのぐくらいよく笑って、優しくて、とても可愛(かわい)かった。

それだけは、悔しいけど認める。

多分、僕の周りの女の子の中じゃ一番だったんじゃないだろうか？

それは、つまり・・・・・・

彼女は僕の初恋の相手だったんだと思う。

・・・・・・・・・・・・・

私の幼馴染はとてもバカだった。

多分、今でもそれは直(なお)ってないんじゃないだろうか？

そのバカに加えて、彼はとてもお人よしだった。

あれは、小学校に上がったばかりだったかな？

近くの公園で私達は遊んでいた。

そして、私達が遊んでいた周辺で私達より一つか二つ上の子供達が遊んでいた。

いや、彼らにとっては遊んでいたのかもしれないが、それは明らかに子犬を虐(いじ)めていた。

その当時の子供にとって、善と悪の区別がついている訳でもないが、誰がどう見ても子犬が嫌(いや)がっているのは見てとれた。

それを見て彼らは楽しんでいた。

けど私達には助けられない。

いや、助けに行っても彼らに返り討ちにあうだけだろう。

それなのに彼は助けに行った。

当然、子犬を助けに行った彼と子供達は喧嘩(けんか)になった。

結局、助けに行った彼はその子供達に勝ってしまった。

いや、怪我(けが)を見るなら彼の怪我は子供達より酷(ひど)かったと思う。

ボコボコに殴られても、彼は決して諦めなかった。

その時初めて、彼はバカでとてつもなく優しくお人よしなんだと気がついた。

僕の記憶と彼女の記憶（後書き）

投稿遅くなってすいませんでした。
まあ、気長に頑張っていきたいと思います。
これからもご愛読よろしくお願いします。

彼女と世話焼き係

１０月１日　ＡＭ８：３０

転校生こと白石　綾香が教室に入ってきてからクラスの生徒達がザワザワと騒(さわ)ぎ出した。

まあ、この辺りは当然の反応だろう。

そして、それを担任の先生が制止させる。

「はい、静かにする！えっと、空(あいて)いてる席は・・・・・・」

そう言って、先生がクラスの中を見回す。

そしてちょうどいい席を見つけたのか、先生が視線を戻す。

「じゃあ、窓際(まどぎわ)の一番後ろに。委員長、悪いんだが彼女が馴染(なじ)むまでしばらく面倒をみてやってくれ」

みんなが委員長の方を見る。

というより、その委員長というのが僕だった。

まあ、僕が立候補したわけでもなんでもなく、無理矢理押し付けられただけなのだが・・・・・・

「それじゃあ、これで以上だ」

そう言って、朝のＨＲ(ホームルーム)が終わった。

ＨＲが終わるとみんな一斉(いっせい)に彼女の周りを取り囲む。

そして質問攻め。

まあ、これも普通の学生としてなら当然か・・・・・・

先生に「面倒みてやれ」とか言われたが、正直頼まれたくない。

というよりどう接していいのか全(まった)くわからない。

・・・・・・いや、それもそうだろ。

昨日あんなことがあったんだ。

そのことを合わせて考えると「面倒をみてやれ」なんて、土下座(どげざ)してでも断りたかった。

委員長に推薦(すいせん)した生徒と、さっき勝手に僕を世話焼き係に任命した先生を心より恨(うら)みたい。

まあ、今はまだ他の生徒に囲まれてるからいいよな。

その間に、解決策を考えておこう。

そう自分で勝手に目標を立てた、今日このごろであった。

僕と彼女の関係

１０月１日　ＰＭ４：３０

「はぁ・・・・・・どうしよう」

何とかしようと決心してから、もうすでに半日近くが経ち、今はもう放課後だ。

でも、時間が過ぎただけで結局解決策は考えつかなかった。

まあ、今日は別に声をかけなくてもいいかな？

なんて考えていたら、向こうのほうから声をかけてきた。

「ねえ、ちょっと！」

聞きなれない声の方を向くと、そこに僕の憂鬱（ゆううつ）の原因が立っていた。

てっきり無視されるだろうと思っていただけに、少し驚いた僕の顔を見て彼女は、

「何・・・・・・その顔？　それより、聞きたいことがあるんだけど」

「えっと、何？」

「あなた・・・・・・私と昔知り合いだった？」

「・・・・・・え？」

今、彼女は何て言ったんだ？

どうやら今のは僕の聞き間違いだったみたいだ。

まあ、一応もう一度問いただしてみる。

「えっと・・・・・・もう一度言ってくれるかな？」

「だから！　あなたと私は昔知り合いだったの！？」

どういうことだ？

何がなんだかさっぱりわからない。

今のこの状況はなんだ？

僕と彼女の関係は一体なんだ？

彼女の今の言葉で、僕と彼女の関係が崩（くず）れたような気がした。

彼女と記憶喪失

１０月１日　ＰＭ４：４０

放課後・・・・・・僕と彼女の二人きりになった静まりかえった教室で僕と彼女の関係は崩(くず)れた

僕が幼馴染(おさなじみ)だと思っていた彼女は、僕のことを忘れていた。

「えっと、どういうこと？　もしかして・・・・・・・覚えてないの？」

「やっぱり知り合いだったか。・・・・・・ええ、そうよ。覚えてない・・・・・・というより、記憶喪失(きおくそうしつ)というやつね」

「記憶喪失？」

「そう。この町から引っ越して、少ししてから交通事故にあってね。それ以前の記憶がまったく残ってないの」

「・・・・・・そうなんだ」

なるほど、そういうわけか。

「でも、それならどうやって僕と君が知り合いだってわかったの？」

僕がそう言うと、綾香は自分の鞄(かばん)の中から何枚かの手紙を取り出した。

「これ・・・・・・川瀬君がくれたものでしょう？」

そう言って彼女が差し出した手紙は、差出人の名前のところに僕の名前が書いてあった。

そう・・・・・・彼女が転校してから僕が彼女に出した手紙だった。

「記憶を失う前の私が取って置いたのだと思う。ケースに入れて大事そうに机の中に置いていたから・・・・・・」

「そっか・・・・・・そうだったんだ」

不意に涙が流れそうになる。

慌てて顔を背けて涙を止めようとするが、間に合わなかった。

一筋の滴が頬を伝って地面に落ちる。

「ごめんなさい。本当は手紙を書こうと思ったのだけど・・・・・・あなたと過ごした記憶もこの手紙に書いている文章しかなかったから・・・・・」

それはそうだ。

記憶喪失前の彼女がいくら僕と親しかったからと言っても、今の彼女は全くの違う人なんだ。

「ありがとう。それだけ伝えてもらえたら十分だよ」

でも、そうなると一つ疑問に思うことが出てくる。

「それと一つ聞いてもいいかな？　昨日の夜、どうして僕が川瀬優一だとわかったの？」

そう、それだけが疑問に残る。

いくら昔の写真を持っていたとしても、今の僕と比べたら顔立ちや身長だって変わっているはずだ。

「昨日の夜・・・・・・？　昨日の夜なら私は自分の家から一歩も出てないけど？」

「・・・・・・え？」

どういうことだ。

「それに私があなたのことを川瀬　優一だとわかったのは、この学校に来てからなんだけど」

その一言が、これから巻き起こることの前兆だったとは、この時の僕はまったく知りもしなかった。

彼女と頼みごと

１０月１日　ＰＭ５：００

「えっと・・・・・・それってどういうこと？」

僕が尋(たず)ねると彼女は当然のように、

「どういうもこういうも、家にいたのに理由がいるの？それより、これから予定ある？」

「い、いや。特に何もないけど」

「なら、この町のこと案内してよ。さっきも言ったとおり、私この町のことほとんど知らないんだよね。だからさ、案内してくれる？」

僕が答えるより早くに彼女は僕の腕(うで)を引っ張って教室を足早に出て行く。

「ちょ、ちょっと待って」

「何？ひょっとして、嫌だとか言わないよね？」

「いや、言わないけど・・・・・・もう少し落ち着こうよ」

「何言ってるの！時間は貴重よ」

「それはそうだけど・・・・・・」

・・・・・・思い出した

確か、僕が知ってる昔の彼女もこんな風にせっかちだった。

そういう意味では、性格はさほど昔の彼女と変わりはないのだろうか？

「さあ、そうと決まったら早く行く行く！」

まったく、どれだけ急げば気が済むんだか・・・・・・

僕が半分呆(あき)れて彼女を見ていると、彼女がそれに気づいて、

「何か私の顔についてる？」

「いや・・・・・・でも、正直驚(おどろ)いたよ。昔の君と性格はほとんど一緒なんだね」

すると彼女は、まあ人格は簡単には変わらないでしょ、とさらりと受け流した。

彼女にしては珍しい受け答えだと思った。

そして、僕らは町案内へと出かけていった。

彼女とナンパのかわし方

１０月１日　ＰＭ５：１０

学校を出てちょうど校門の辺りを通りかかったところに、今一番会いたくないやつが数人の友人と一緒に話しながら立っていた。

「なあ綾香、裏門から帰ることにしない？」

すると彼女はいかにも「何で？」という顔で僕のほうを見てくる。

僕は彼女にアイコンタクトで彼らのことを伝えたが、彼女は別に気にするつもりもなく、

「別にいいじゃない。見られてマズいことでもあるの？」

「い、いや、そんなのは別にないけど。でも、あいつらは僕と綾香が昔知り合いだったことを知らないから・・・・・・」

「明日、学校に行ったら話題になってるって訳？」

察(さっ)しが良くて話す手間が省(はぶ)けて助かる。

僕が頷(うなず)くと、彼女は、

「あ、そう。でも私はそういうの気にしないから大丈夫よ。あなたに何か問題があるなら裏門からでもいいけど？」

「なら、そうして。あんまり目立つのは好きじゃないから」

「そう。わかったわ。その代わり・・・・・・」

「？」

彼女が何を言おうとしているのかわからずに、僕が尋ねようとしていると、後ろから声がかかった。

「よお、優一。何やってんの、こんなところで？　・・・・・・って、その娘は？」

はぁ・・・・・・最悪だ。

一番見つかりたくないやつに見つかってしまった。

「もしかして、今日お前のクラスに転校してきた娘か！？」

「そうだけど・・・・・・」

「マジで！？　かわいいじゃん！　もしかして、付き合ってるの？」

そう言って、彼女と目が合ったらしく、彼女の方が軽く会釈をした。

「そんなわけないだろ」

「なんだ。それなら別にいいな。ねえ今から、遊びに行かない？」

・・・・・・おいおい。

会ったそばからナンパって・・・・・・・

話しを振(ふ)られた彼女は、笑みを絶(た)やさないようにして、

「ごめんなさい。今からちょっと彼と寄るところがあるので、また今度誘ってくれるかしら？」

なんだ今の僕との接(せっ)し方の違いの差は・・・・・・・

でも、ナンパをかわすには一番の策だよなぁ・・・・・・・

なんて、悠長(ゆうちょう)なことを考えていると、彼女の方が僕の腕を引っ張って、

「それじゃあ、急ぎますので。また今度」

なんて言って、相手に話を続けさせる前に立ち去ってしまった。

あまりの会話の進め方に少し尊敬してしまった僕と、当たり前のような顔をして平然とやり過ごした彼女。

そして、足早に僕と彼女はその場を去っていった。

彼女とナンパのかわし方（後書き）

こんにちわ皆さん。
今日は久しぶりにあとがきを書いてみようかと（笑）
まあ、書くと言ってもそこまで大したことは書けませんが（笑）

前回や今回で彼女こと綾香の性格がほとんど決定してしまったような気がします。
作者としての僕にとっても、キャラクターの性格を決めてしまうということはあまり好きではありません・・・・・
だって、性格が決まったら、大体の行動は予想できちゃいますからね。
まあ、性格を決めるということも重要なことですけどね（笑）

それと皆さんにお願い・・・・というかリクエストがあります。
もしよかったら評価や感想などを書いてもらえないでしょうか？
感想と言っても、「キャラクターの設定をこうしてほしい」とか、「ハッピーエンドで終わってください」とか、「もう少し丁寧に書けよ」みたいな・・・・・そういうもので結構です。
どうぞ、よろしくお願いします。

彼女と朴念仁

１０月１日　ＰＭ５：１５

「上手いものだね」

「何が？」

僕がそう言うと彼女は本当にわからないような素振(そぶ)りを見せた。

「誘いの断り方だよ」

「ああ、あれね。前にいた学校ですごく可愛(かわい)い子がいてね、その子と友達になって一緒にいたらいつの間にか覚えてた」

「へえ、そうなんだ。・・・・・・ところでどこに向かってるの？」

「・・・・・はい？　あなたが何も言わないからこっちの道でいいのかと思っていたんだけど？」

そうだった。

彼女はこの町を覚えていないんだ。

そのことを完全に忘れてた。

「ごめん。君がこの町を知らないってことを完全に忘れてた・・・・・・」

すると彼女は完全に呆(あき)れた様子で、僕の方を見て、

「要するに『何も考えていませんでした・・・・・・』って言うオチなのね」

彼女の言ってることは的中(てきちゅう)していて、何も言い返せなかった。

僕が何も言い返せずに黙(だま)っていると、彼女の方から空気が悪くなったのを感じたのか話しを切り出してきた。

「・・・・・・まあ、いいわ。それじゃあ、ここから一番近いおすすめスポットは？」

「えっと・・・・・・ここからだと・・・・・・」

ここから一番近いおすすめの場所？

やっぱり、こういうときは普通の女の子が行く場所を教えたほうがいいのかな？

でも、個人的にはもっといい場所もあることはあるんだけど・・・・・・

そんなことを悩(なや)んでいると、彼女の方が、

「・・・・・・あなたって本当に何も考えていないの？」

「いや、僕も考えていることは考えているんだけど・・・・・・この場合は、僕のおすすめする場所がいいの？　それとも、普通の女

の子が行くような場所の方がいいの？」

そう言うと、彼女は目をパチパチと瞬(しばた)かせて、

「そんなことを今まで考えていたの？」

「うん、まあ」

すると彼女はため息をついて、

「前から思ってたんだけど、あなたって朴念仁(ぼくねんじん)でしょ？」

彼女は小さい声で何かボソッと呟(つぶや)いたけれど、僕にはそれが聞き取れなかった。

「ごめん、今なんて言った？」

「いえ、やっぱりいいわ。それより、おすすめの場所は決まったの？」

「あ、うん。それならいい場所があるよ」

僕が一番いいと思った場所。

それは、僕と彼女の一番の思い出の場所。

彼と記憶

１０月１日　ＰＭ５：４０

「着いたよ」

そう言って、彼が案内してくれた場所は川原だった。

「ここは？」

私がそう尋ねると、彼は少し悲しそうな顔をしていた。

「ここはね・・・・・君と僕が最後に会った場所だよ」

そう言った彼の横顔を私は一生忘れないだろう。

だって、あんなに寂しそうな表情をした人を私は今まで見たことがなかったから。

「やっぱり思い出せない？」

再度彼は私に尋ねるが、私の記憶の中にこの川原は見つからなかった。

私は首を横に振ると、彼は何も言わずにただ正面を向いてうっすらと笑った。

彼の笑顔はガラスのようだ。

このとき、私はそう思った。

少しでも触(ふ)れてしまったら壊(こわ)れてしまう・・・・・・そんな気がした。

「ここはどう？　気に入ったかい？」

彼の言葉で、ようやく我にかえって辺りを見回す。

特別、綺麗(きれい)という訳ではないし、空気がおいしいという訳でもない。

でも、なぜだろう。

不思議と気持ちが落ち着く。

多分、記憶を失う前の私はここが好きだったのだろう。

自然とそのことがわかってくる。

本能的なものだろうか・・・・・・よくわからないが、この場所は私に良く合っている気がする。

そして、もう一つ私の中で気がついたことがある。

多分・・・・・・いや絶対と言ってもいい。

私は彼のことが好きだった。

彼女と続かない会話

１０月１日　ＰＭ５：４０

彼女を見ていると全身が凍(こお)りつくように固まってしまう。

彼女に見つめられると、心臓が止りそうになり息をするのも苦しくなる。

彼女に話しかけられると・・・・・・僕は彼女が欲(ほ)しくなる。

「ねえ、聞いてるの？」

「え・・・・・・？」

まずい・・・・・・いつの間にか自分の世界に入り込んでいたみたいだった。

「ごめん、ちょっと考え事を・・・・・・」

そう言うと、彼女は半分怒っているように、半分呆(あき)れているようだった。

「まったく、人が話しているときに考え事なんて、君は友達に嫌(きら)われる方の人だね」

「いや、結構(けっこう)友達いるほうだと思うけど」

そうは言ったものの、今の回答は半分しか当たっていない。

僕の場合は、知り合いは多いが親友はいないパターンの人だ。

そう考えれば、彼女の言い分は当たっているのだろう。

「はい、すぐに反論(はんろん)しない。とにかく、人が話しているときは集中して聞く！」

僕が適当に頷(うなず)くと、彼女はよしと言った様に「次からは気をつけなさいよ」と言われた。

・・・・・・というか、なんの話しをしていたんだろう？

「ねえ、さっきの会話文をもう一回だけ話してくれない？」

「いいよ、別に・・・・・・そんな大した話しじゃなかったし」

「そう？　ならいいんだけど・・・・・・」

「・・・・・・」

「・・・・・・」

気まずい沈黙(ちんもく)。

なんか話さないといけないのはわかっているのだが・・・・・・

会話が続かない。

だが、先に言葉を発(はっ)したのは彼女の方だった。

彼女と恐怖

１０月１日　ＰＭ５：４０

「私って、いつからあなたのことを・・・・・・」

そこまで言って口ごもる彼女。

「いつから・・・・・・何？」

僕がそう言うと、彼女は空を見上げるように顔を上げて、

「いつから、あなたのことを『ゆう君』なんて呼び方をしていたの？」

『ゆう君』・・・・・・？

そうだ、昨日の夜出会った少女も僕のことを『ゆう君』って呼んでいた。

僕をそんな呼び方で呼ぶのは、両親と彼女しかいないということはわかっていたのに・・・・・・

どうしてそんな重要なことを忘れていたんだ？

いや、そういえば最近、何かがおかしい。

具体的に何かとは言えないが・・・・・・

「・・・・・・ねえ、聞いてるの！？」

「え？」

「その顔、やっぱり聞いてなかったわね。今日、２回目よ」

「いや、いつのことか思い出そうとしてて・・・・・・」

「話だけは聞いていたのね。それで、思い出した？」

僕は首を横に振った。

彼女は、「そう」とだけ言って、気にしている素振りは見せなかった。

いや、きっと知りたかっただろう。

今の彼女にとってみれば、そこの事柄にどれほどの価値があるか僕にはわからないが、少なくとも『無』でないことだけは確かだった。

だって、そうだろう。

今の彼女にとって、記憶の欠片だけが唯一の彼女を構成する材料なんだ。

記憶が自分の世界を構築していく。

それは誰だって同じことだろう。

例えば、昨日の記憶がなくなったとする。

そうすると、きっと僕も含(ふく)めて、皆何かしらの恐怖(きょうふ)を覚えるだろう。

だって、昨日の自分が何をやったかわからないんだ。

失恋をしたかも、犯罪を犯したかも・・・・・・

もしかしたら、殺人を犯したかもしれない。

そう考えれば、彼女が味わった恐怖はどれほどのものだっただろう。

・・・・・・想像も出来ない。

そう考えると、今の彼女が存在しているというのは、きっと奇跡(キセキ)に近い確率(かくりつ)なんだと思う。

夕日と彼女

１０月１日　ＰＭ５：５０

「それじゃあ、そろそろ帰ろうか？」

辺りはもうすでに夕日が沈みつつあり、秋の夜へと姿を変えつつあった。

彼女にとってはここはつまらない場所だったかもしれないな……

なんて、自分の中で少し後悔しながら彼女のほうを見ると……

綺麗

その言葉しか思いつかない。

もうすぐ、その姿が沈み無くなるだろう夕日に照らされた彼女

とても寂(さみ)しげなのに、どこか優しさがこみ上げてくるようなその表情。

僕は生まれて初めて……

１６年間生きてきて始めて、感動というものを味わった。

夕日と彼女（後書き）

大変遅れて申し訳ありませんでした。
１１月の半ばからＰＣの状態がよくないので、修理に出したら……
なんと寿命ということでした。

なので、新しいＰＣを買うまでの余白の期間はただテレビを見るという行為のみ……

とても暇でしたが、これからは更新頑張っていこうと思います＾＾

彼女と僕の距離

１０月１日　ＰＭ６：００

「……」

「……綾香？」

僕の問いかけに反応を見せない彼女。

彼女の近くに寄って行っても、反応はない。

どうしたんだろう？

その時、ちょっとしたいたずら心が僕の考えに浮かんだ。

それは彼女の耳元で大声を出してみるというものだった。

きっと驚くだろうな。

彼女の驚いた顔を想像したら、少し笑ってしまった。

それから先は実行あるのみ。

気づかれないように、足音を立てずに彼女の後ろまで歩いていく。

そして、さらに接近。

この辺でいいかな？

普通なら気づかれてもおかしくない距離で大声を上げようとしたとき、彼女が不意に後ろに振り返った。

あまりにもとっさのことで、何も反応できなかった。

そして、その時ちょうど

僕の唇に彼女の唇が触れた

僕と彼女とキス

１０月１日　ＰＭ６：０５

「ッ！？」

あまりに突然のことで、何の反応も出来なかった。

どうやらそれは僕だけではなく彼女も同じみたいで、僕と彼女はしばらく動けなかった。

それはきっと、ほんの１秒か２秒程度のものだっただろう。

でも僕にとってみれば、それはまるで地球が静止したかのように、数分……いやもっと長い時間それが続いていたような気がした。

先に動いたのは彼女の方だった。

彼女はそのまま僕と少し距離をとると、そのまま後ろを向いて座り込んでしまった。

僕の方は……何が起こったのか未だによく理解できていなかった。

いや、理解はしていたのかもしれないな。

ただ、その後どうしていいのかがまったくわからなかった。

だって、それが例え事故だったとしても……

僕にとって、キスをするということは初めての経験だったのだから

情けない自分と彼女

１０月１日　ＰＭ６：０５

早く謝らなければいけないことは理解していた。

たとえ事故だったとしても、不可抗力だったとしても、原因を作ったのは間違いなく僕だったから。

でも、何て言っていいのかがわからなかった。

ごめんなさい？

その一言で本当に全てが解決するのだろうか？

そんな単純な一つの単語が、本当に今の事故を無かったことに変えられるのだろうか？

いや、でも……

それを言ってしまったら

僕の中の何かが終わってしまうような気がした。

その一言で、

僕の今までが全て壊れていって、塵（ちり）一つとして残さないような……

僕は一体なんなんだ？

一人の女の子に謝ることもできないのか？

そう思うと、自分自身に腹が立った。

そして、結局

僕と彼女は何の会話もないまま別れてしまった。

僕とネガティブ思考

１０月１日　ＰＭ１０：００

「クソ！！」

あれから家に帰ったけど、自分の感情が整理できずに遂(つい)に自分の部屋の壁に八つ当たりしてしまった。

生まれて初めて殴ったものが、自分の部屋の壁って……

壁(かべ)を殴った右手はしばらく痛んだが、そんなことはどうでもよかった。

むしろ、今の自分の感情が解決できるならこんな痛みどうということはなかった。

でも実際、そんなに簡単に自分の気持ちが晴れるわけがない。

僕の中にはまだ、とても濃(こ)い雲が張(は)り詰(つ)めていて快晴にはほど遠かった。

あの時、一言だけでも謝っておくべきだった。

そんなことを後になってから考えてしまう。

自分でもここまでネガティブ思考の持ち主だとは思ってなかった。

いや……今まで悩みがなかっただけなのかもしれないな。

自分をあざ笑う意味も含めて少しだけ微笑(びしょう)を浮かべたつもりだったが、きっととても酷(ひど)い顔になっていただろう。

どうやら僕に悲劇(ひげき)の主人公役はできそうにないな……

まったく、再会して二日目で喧嘩(けんか)って……

「明日、学校休みたいな……」

僕と迷い

１０月２日　ＡＭ６：００

「朝……か」

カーテンの隙間(すきま)から差し込んだ太陽の光で目が覚めた。

あれからベッドで色々と考えているうちに眠ってしまったらしい。

結局、考えはしたが解決策は見つからなかった。

「隕石(いんせき)でも学校に落ちてくれないかな……」

そんな絶対にありえないことを願ったりしてみるが……そんなことは万に一つの可能性もないだろう。

「仕方ない……とりあえず学校に行くか。対処方法は……会ってから考えよう」

どうせ考えたって始まらないんだ。

なら会ったときにその時なりの対処方法があるだろう。

我ながら、なんとも楽観的な考えだった。

普段ならしっかり計画を立ててから行動するのが自分なりの流儀(りゅうぎ)なのだが……今回ばかりは、そんな手段をとるしかなかった。

だって、こんな経験を今までにしたことがないんだから。

「まあ、最終的に謝らないといけないんだろうけど」

でも、故意じゃないことは伝えないと。

それだけは誤解されたら困る……

困るって何にだ？

それはもちろん、僕が綾香のことが好きじゃないということの……

いや、それは違う。

僕は綾香のことが好きだ。

でも、それは友人としてなのだろうか？

それとも……

彼女と欠席

１０月２日　ＰＭ７：４０

それから学校に行ったけれども、まだ綾香は登校してきていなかった。

会ったらまず謝ろう。

いや、でも呼び出して謝ったほうがいいかな……

なんかだんだん引き気味になってる気がするけど……

ここは、後で呼び出して謝ろう。

刻々（こくこく）と時間が進んでいき、生徒も少しずつ教室を満たしていったが、綾香はまだ来ていなかった。

そして結局、ホームルームが始まっても綾香が教室のドアを入ってくることはなかった。

ホームルームが終わり、クラスメイト達が口々（くちぐち）に話題にするのが綾香のことだった。

まあ、転校２日目で欠席というのはあまり聞かないからだろう。

それに、なんだか男子の間では結構人気あるみたいだし。

綾香にメールをしようにもアドレスを聞いてないから出来ないし……

『まあ、今日はいいか。どうせ住所も電話番号もわからないんだし』

そう思っている自分がとても情(なさ)けなかった。

それに、今動かないといけないような気がした。

なぜかはわからないけど……

僕の直感がそう言っているような気がした。

１０月２日　　ＰＭ５：２０

放課後になり生徒の数も少しずつ教室の中から消えていく。

一目見ただけでも、全体の４分の１くらいの数だろう。

まったく、そんなに早く帰って何かいいことでもあるのだろうか？

とまあ、現在は放課後。

これからどうするか……

おとなしく家に帰って、みんなと同じように宿題をして、今日の１日を終わらせようか？

それとも、担任の教師に綾香の住所を聞いてお見舞いにでも……

僕の選択肢は今のところこの２つ。

でも、綾香が今日休んだのは昨日のことが原因かもしれない。

そうしたら、お見舞いなんてかえって逆効果なんじゃ……

もし僕が彼女に会いに行って、もし彼女にまた嫌われるようなことがあったら……

いや、どれだけネガティブな考えだよ。

『もし』だけの考え方じゃいい結果は生まれない。

まずはそのネガティブな考え方を変えないと。

結局、僕が選んだのは……

僕とお見舞い

１０月２日　ＰＭ６：３０

結局、あれから担任の先生に綾香の欠席した分の課題のプリントを持っていくために住所を聞いたわけなんだけど……

「ここが……綾香の家か？」

今、僕の前には一軒の家が建っていた。

その家は周りの家の2倍から3倍くらいの大きさはありそうな豪邸だった。

「おいおい……マジですか」

あらためて表札を見てみるが確かに『白石』と書いてある。

小さい頃に白石一家が住んでいた家は確か僕の家と同じくらいの大きさだったと思うんだけど……

「あれから一体なにがあったんだよ？」

とりあえず呼び鈴を押してみるが、

「……」

応答なし。

「まさか学校サボって街をふらついてるなんてことは……」

いや、絶対にそんなことはないはずだ。

少なくとも、僕の知っている綾香は絶対にそれはありえない。

だとすると、呼び鈴に出られない理由は……

まさか、体調が悪くて倒れてるとか。

「い、いや、まさかな」

だが、考えるほどに想像が現実に起こっているように感じられてくる。

人間は不安になると、どんどん悪いことが思いついてしまうというのは本当みたいだ。

「こういう場合は仕方ないよな」

僕は意を決して白石家のドアに手を掛ける。

僕と彼女の家

１０月２日　ＰＭ６：４０

辺りはすでに夕焼けで紅く染まっていた。

覚悟を決めてドアノブに手を掛けると、ドアはスムーズに開いた。

「おいおい、鍵くらいかけとけよ」

どれだけ無用心なんだよ。

もしかして、綾香の叔母（おば）さんがいたりして。

でもそれなら呼び鈴に出てくれるか。

じゃあ、やっぱり今の考えは却下（きゃっか）だな。

家の中は物音（ものおと）一つしない静寂に包まれていた。

「失礼しま～す」

恐る恐る声に出してみるがやはり返答はない。

ここまで静かだと、自分が悪いことをしているようで気が引ける。

いや、これって不法侵入になるのか。

ならやっぱり、おとなしく帰るべきだろうか。

「いや、でもここまで来たんだから……」

それに、小さい頃はよく遊んだ仲だし。

そう考えると、それほど不自然ではないかな？

そして僕は彼女の家の中へ一歩踏み込んだ。

僕と無人の家

１０月２日　ＰＭ６：４５

とりあえず優先目的は綾香だ。

綾香に会わないことには先に進めない。

玄関で靴を脱いで廊下を進むとリビングらしき場所に出た。

そこにも綾香の姿はなかった。

無人のリビング……

それがやけに孤独に感じたのはなぜだろう。

とりあえずリビングを拠点（きょてん）に他の部屋も探したが、１階のどの部屋にも綾香はいなかった。

「仕方ない、２階に行くか」

そう思い、階段へと足を運び上（のぼ）っていく。

１階と同じく、２階の部屋数も随分（ずいぶん）多いようだった。

その中を１部屋ずつ順に探していく。

だが、どの部屋にも綾香の姿はなかった。

いや、それ以前にこの家はどこかおかしい。

どこが……と言われたらは詳しく言えないのだが……

簡単に言えば人の住んでいる気配(けはい)がしない。

それが家具の少なさからくるものなのかどうかはわからないが……

とにかく、この家はおかしかった。

僕と無人の家（後書き）

僕と異変

１０月２日　ＰＭ７：２０

あれから、しばらくリビングで綾香の帰りを待っていたが一向(いっこう)に帰ってくる様子はなかった。

「しかたない、今日のところは帰ろう」

そう思い、リビングのテーブルの上に宿題のプリントと自分のメモ帳に一言を添(そ)えて置いておくことにした。

でも、綾香が学校をサボって外出をしてるんなんて……。

小学校の頃の彼女ならありえないことだった。

少なくとも僕が知っている彼女はそんなことはしなかったと思う。

いや、あれからもう3年以上か……。

それだけ間(あいだ)が空けば性格くらい少しは変わるのだろうか？

「よし、これでいいかな」

『今日の欠席分の宿題です。

出来るだけ早く学校に来てください。　　川瀬　優一　』

まあ伝えることはこれくらいで全部だし、ホントは不法侵入なんだけど……。

「それじゃあ帰ろうか」

そう思い、椅子(いす)から立ち上がろうとした瞬間に自分の呼吸がおかしいことに気がついた。

ヒューヒューと明(あき)らかに通常(いつも)と違う呼吸音。

過呼吸。

そう気づいたときには手遅れだった。

少しずつ手足が痺(しび)れ、意識も朦朧(もうろう)とし始めていた。

おかしい、どうして過呼吸になった？

そんな出来事なんてなかったはずなのに……。

とにかく、紙袋か何かで呼吸を整えないと。

そう思うが、足がふらつきそのまま前のめりに倒れてしまった。

そしてゆっくりと、意識を失っていった。

僕と忘却

「……ここは……どこだ？」

目を開けると、視界には闇のように暗い黒しか見えなかった。

体を起こそうとすると、手にはシーツの感触が絡(から)んできた。

どうやらベッドに寝かされていたみたいだ。

でも、なんで？

「確か綾香の家に行って……あれ？」

そういえば、あれからどうなったんだ？

綾香の家に入って以降の記憶がなくなっていた。

まるで白いペンキでそこだけ塗りつぶされたように、そこの記憶がない。

そのことに苛立ちと、それ以上に恐怖を感じた。

だってそうだろ。

今がいつなのかもわからないし、何をしていたのかさえわからない。

肝心な携帯電話も鞄(かばん)の中に入れていたので使えない。

「とりあえず、今はここから出よう」

僕と忘却（後書き）

更新遅れて大変すみませんでした。
いろいろと忙しいこともあって、ながらくＰＣとの接続も出来ておらず、ようやくＧＷに暇ができました。
これからも更新がおくれることがあると思いますが、出来るだけ早くに更新しようと思うので、どうぞよろしくお願いします。

僕と見知らぬ部屋

なんとか僕が寝かされていたベッドと思われるところから抜け出し、壁を頼りに進んでいく。

すると、手に壁とは違うプラスチックの冷たい感覚が感じられた。

形から推測すると、何かのスイッチのようだ。

とりあえず、それを押してみると……一瞬にして視界が真っ白になった。

どうやらこの部屋の電灯のスイッチだったみたいなのだが、目が暗闇に慣れていたせいで眩しさのあまり目を開けることができない。

しばらくして、ようやく目を開けられるようになると、そこは僕の知らない部屋だった。

辺りを見回すが、僕の知っているものは何もなかった。

部屋の中には見ただけで高級品だとわかる西洋風の家具や骨董品の数々。

「……ここは一体？」

もちろん僕の部屋でないことだけは確かだ。

僕の人生を遡(さかのぼ)っても、こんな部屋に住んでいる知り合いはいない

し、いた覚えもない。

どこかのお城の中だと言っても疑う者はいないだろう。

それほどまでにこの部屋は現実味を帯びていなかった。

「とにかく、ここがどこか調べないと」

そう思い、僕は部屋の片隅にあるドアへと進んでいった。

僕と記憶

ドアノブに手を掛け、回そうとしてみるが……

「開かない」

右に回しても、左に回しても駄目だ。

おそらく扉(とびら)の向こう側から鍵(かぎ)をかけられているのだろう。

となると、自分の意思ではドアを開けることは出来ないわけだ。

もう一度部屋の中を見回してみるが、窓はおろか天窓(てんまど)一つ備え付けられていない。

よく見ると家具にしても必要最低限のものしかそろっておらず、とても日常生活に使っている部屋には見えない。

「とりあえず冷静になろう。確か学校から綾香の家にプリント類を持ってお見舞いに行ったんだよな？　それから……」

やっぱり駄目だ。それ以上の記憶はまったく思い出せない。

この部屋には時計もなく、今がいつなのかすらわからない。

とりあえず、さっきまで寝かされていたベッドに腰かけ、もう一度周囲を見回してみる。

とそのとき、扉の向こうから『ガチャ』と金属が擦(こす)れあうような音がした。

僕と彼女の存在

「誰だ！？」

ゆっくりと扉が開き一つの人影が見えた。

「綾香？」

この部屋とは違い廊下（ろうか）には明かりがついていないようで、真っ暗だった。

そのせいで、この扉を開けた人物はよく見えない。

ただ、綾香という単語は意識せずに出てきた。

それほど僕の中で綾香の存在は大きいということだろうか？

「……」

返事はない。

それは肯定（こうてい）のサインと受け取ってもいいのだろうか？

「どうしたんだよ？　それより」

「ごめん」

その返答した声で確信した。

間違いなくこの声は綾香だ。

そして僕が話し終えるより先に綾香はその言葉を口にした。

「ごめんって……何が？」

だが僕の質問に綾香の答えは返ってこなかった。

よく見ると綾香の頬には一滴の液体が光に反射していた。

それが涙だとわかるまでに時間は必要としなかった。

「泣いて……いるのか？」

僕の質問に綾香は首を横に振るだけで何も言わない。

だがそれでもよかった。

僕の側に綾香がいてくれるだけで、その時の僕は幸せだったから。

そう、僕がなぜここにいたのかなんてことはもう頭から吹っ飛んでいた。

彼女と冷たさ

「どうしたんだよ。なんで泣いてるんだ？」

僕の質問に綾香は答えない。

僕は立ち上がって彼女の側に歩み寄っていく。

少しずつ、少しずつ、彼女との距離が縮まっていく。

そしてその距離がゼロになったとき、僕が彼女を支えるような形となった。

自然と肌と肌とが密着する形になったが、妙な興奮は起きなかった。

寧(むし)ろ彼女の存在が今にも無くなりそうな気がして、出来るだけ優しく包み込んで上げたいとさえ思ったほどだ。

密着した肌からは彼女の体温を感じ……

いや、感じなかった。

彼女の肌はとても冷たかった。

まるで死者のように、彼女の体はひどく冷たかった。

そこで僕の頭になんとなく一つの考えが浮かんだ。

『ああ、彼女はもしかしたら人間ではないのかもしれない』

そう、そんなことはあるはずがないのに。

そんなあるはずもないことを、僕は考えてしまったんだ。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3519i/

秋風と星と奇跡

2011年1月6日14時23分発行